

ひ な た だ い せ き

日向田遺跡Ⅲ

貸店舗建設に先立つ
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1994年3月

長野県飯田市教育委員会

ひ な た だ い せ き

日向田遺跡Ⅲ

貸店舗建設に先立つ
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1994年3月

長野県飯田市教育委員会

序

最近、新聞に考古学関係の記事がよく見受けられます。各地で発掘調査が行なわれていることの現れ、言い換えればそれだけ開発が進んでいるのだとも取れます。この飯田市においても公共事業や民間開発に伴う埋蔵文化財発掘調査は年々増加しております。地域社会が発展することは喜ばしいことですが、今日まで伝承されてきた文化財を後世に残し伝えていくこともまた大切なことと考えます。

実施される発掘調査からは、先人たちの生活の様子を示す事実がつつぎと確認されております。これらの事実ひとつひとつの積み上げが地域の歴史再構築に大きな役割を果たすことはいうまでもなく、破壊せざるを得なかった文化財を後世に伝える方法でもあるわけです。

今回発掘調査を実施した日向田遺跡は、飯田市鼎上山地籍にあり、市道が153号バイパスに接続したため、近年急速に商業地化している場所です。この地でも何か所かの発掘調査が行なわれ、縄文時代から平安時代までの集落址が確認されています。

今回の調査では、調査面積の割には遺構の分布が密で平安時代の住居址を5軒確認することができました。

内容については、本文中に記したとおりであり、今後の研究に供されることを希望しております。

発掘調査は、その結果として文化遺産の破壊になるわけです。できることならば、現在までそうであったように、残っているままの姿で後世に継承していくことが私たちの責務だといえます。しかし、現在生きている私たちにも生活があり、地域全体における今日的な課題解決の必要もあるわけです。地域社会の発展と文化財保護が調和のとれた地域にすることがこれからの重要な課題だと考えます。

最後になりましたが、調査実施にあたり、その趣旨を深いご理解をいただいた株式会社平安堂をはじめとする関係各位と、酷寒の中での発掘作業、細かい整理作業に従事した調査関係者の皆様に心よりの感謝を申し上げて、刊行の言葉といたします。

平成6年3月

飯田市教育長 小林恭之助

例 言

1. 本書は飯田市鼎上山地籍における株式会社平安堂の貸店舗建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地日向田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は株式会社平安堂の委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は平成4年11月9日～平成4年12月21日まで実施した。整理作業及び報告書の作成作業は平成5年度に実施した。
4. 発掘調査及び整理作業では、遺跡名の略号は以前に発掘調査を実施した時に使用したHNDに地番の3662を付けHND3662とした。
5. 本書の記載順は、住居址・竪穴・土坑・溝址・柱穴の順に記述した。
6. 遺構番号については、隣接地で調査を実施した周辺調査で検出された遺構番号と連続して用いた。
7. 本書の記載は、遺構図を本文に併せて挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。
8. 本書は吉川豊が執筆した。なお、本文については小林正春が加筆・訂正を行なった。
9. 本書の編集は、調査員全員で協議により行ない、小林正春が総括した。
10. 本書に関連する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

本文目次

序	I
例言	II
目次	III
I 経過	1
調査に至るまでの経過	
試掘調査の経過	
発掘調査の経過	
整理作業の経過	
調査組織	
II 遺跡の環境	3
自然環境	
歴史環境及び周辺遺跡	
III 調査結果	9
(1) 竪穴住居址	9
① 7号住居址	
② 8号住居址	
③ 10号住居址	
④ 11号住居址	
⑤ 12号住居址	
(2) 竪穴	12
① 竪穴 1	
(3) 土坑	12
① 土坑14	
② 土坑15	
(4) 溝址	13
溝址 1	
(5) 周辺柱穴	14
(6) 遺構外出土遺物	14
IV まとめ	17
V 引用参考文献	35
VI 抄録	36

挿 図 目 次

挿図1	調査遺跡及び周辺遺跡位置図	4
挿図2	調査位置及び周辺図	5
挿図3	調査範囲	6
挿図4	遺構分布図	7
挿図5	7号住居址	9
挿図6	8号住居址カマド	9
挿図7	10号住居址	10
挿図8	11号住居址	11
挿図9	12号住居址	11
挿図10	竪穴1	12
挿図11	土坑14・15	13
挿図12	周辺柱穴(1)	14
挿図13	周辺柱穴(2)	15

図 版 目 次

第1図	7号、8号、10号住居址出土遺物	21
第2図	10号、11号、12号住居址、土坑14出土遺物	22
第3図	遺構外出土遺物	23

写 真 図 版 目 次

図版1	調査区全景	27
図版2	7号・10号住居址	28
図版3	11号・12号住居址	29
図版4	7号・8号・10号住居址出土遺物	30
図版5	10号・11号住居址出土遺物	31
図版6	12号・土坑14・遺構外出土遺物	32
図版7	遺構外出土遺物	33
図版8	作業風景	34

I 経 過

1. 発掘に至るまでの経過

株式会社平安堂は、飯田市鼎地区に貸店舗を建設することを計画した。場所は運動公園通りぞいのたんぼである。そこには、すでにレンタルショップ『ナイスデイ』（平安堂）や紳士服の『青山』が建っている。また、運動公園通りをはさみ『飯田信用金庫鼎切石店』がある。この店舗建設に先立って行われた埋蔵文化財包蔵地「日向田遺跡」では住居址等が確認されている。したがって建設予定地も包蔵地の一部と見られることから、工事実施前に現地協議を実施することとした。

協議は、長野県教育委員会文化課の担当指導主事、飯田市教育委員会社会教育課職員および開発主体者である平安堂と工事施工業者である木下建設の担当者との間で実施した。その結果、開発用地全域の試掘を実施し地下の様子を調べ、その結果に基づき再度協議することとなった。

2. 試掘調査の経過

用地は水田でありすでに片付いていたため、11月9日に重機により3本のトレンチをあげ、10日から作業員により遺構の確認を実施した。地山まではかなり浅く、耕土の下に褐色の砂土が現れる。これが地山であったが、トレンチ開坑時に深く地山を掘り込んでしまったため、一部遺構を破壊した箇所もあった。調査の結果、全体から遺物が出土し、トレンチの断面に遺構が確認できたため、再度協議を行ない遺跡の記録保存を実施することになった。

3. 発掘調査の経過

再協議の結果発掘を実施する箇所は、建物の基礎部分のみとなった。試掘の状況から地山までは非常に浅いことが確認できていたため、12月2日からの重機による表土剥ぎは慎重に実施した。

西側に進むにしたがい、地山までの深さは徐々に深くなる。土地の所有者に聞いたところ、以前小さな水田があったのを整理して、現在の形にしたとのことであった。言葉とおり、漆黒土の堆積の上に地山を形成している褐色の砂土が堆積し、その上が耕土であった。

表土剥ぎ作業終了後人力による遺構検出と遺構掘り下げを実施した。その結果住居址は5軒・溝1本、土坑1基等が調査できた。その後、写真撮影と遺構の実測を行ない、12月21日に現地での作業を終了した。

4. 整理作業の経過

平成5年度に入ってから整理作業を行なった。遺物の洗い、注記、復元作業を順次行なうと共に、凶面や写真類の整理作業も実施した。遺物は出土量の割に完形になるものは少なく、石器類もほとんどなかった。遺物の実測は復元の終了を待って行ない、それに平行して遺構図のトレースを実施した。原稿執筆、図版組みを行ない報告書の刊行となった。

5. 調査組織

1) 調査団

調査担当者 小林正春

調査員 佐々木嘉和 佐合英治 吉川 豊 馬場保之 渋谷恵美子 吉川金利
下平博行 福沢好晃

作業員 今村春一 大原正一 木下喜代恵 北原森作 北村重実 小池金太郎
小池千津子 坂下やすゑ 中平隆雄 西尾茂人 橋場喜人 福沢幸子
森 章 吉川正実 新井ゆり子 池田幸子 金井照子 金子裕子
唐沢古千代 木下早苗 木下玲子 櫛原勝子 小平不二子 小林千枝
佐藤知代子 斎藤徳子 田中恵子 中島真弓 丹羽由美 萩原弘恵
平栗陽子 福沢幸子 古根素子 牧内喜久子 牧内八代 松島直美
松本恭子 三浦厚子 南井規子 宮内真理子 森藤美知子 吉川悦子
吉川紀美子

2) 事務局

飯田市教育委員会

安野 節 飯田市教育委員会社会教育課長

原田吉樹 飯田市教育委員会社会教育課文化係長

小林正春 飯田市教育委員会社会教育課文化係

吉川 豊 飯田市教育委員会社会教育課文化係

馬場保之 飯田市教育委員会社会教育課文化係

渋谷恵美子 飯田市教育委員会社会教育課文化係

福沢好晃 飯田市教育委員会社会教育課文化係

吉川金利 飯田市教育委員会社会教育課文化係 平成5年度

下平博行 飯田市教育委員会社会教育課文化係 平成5年度

篠田 恵 飯田市教育委員会社会教育課社会教育係 平成4年度

岡田茂子 飯田市教育委員会社会教育課社会教育係 平成5年度

II 遺跡の環境

1. 自然環境

日向田遺跡は飯田市鼎切石および上山地区に所在する。飯田市は西に木曾山脈、東に赤石山脈と伊那山脈に挟まれた伊那谷の南部、天竜川による河岸段丘が著しく発達した地域である。飯田市域では、この河岸段丘がさらに大小の支流により開析され、扇状地、河岸段丘、小盆地が複雑に入り組み、変化に富んだ地形が形成されている。

鼎地区は天竜川の支流松川の形成する氾濫原と河岸段丘の上に広がる地域である。市街地から見れば松川を挟んで南西約2kmに位置している。

日向田遺跡は、松川が形成した河岸段丘の低位段丘に属する上山・切石段丘面上に位置する。遺跡の南側には、松川流域河岸段丘を低位段丘と中・高位段丘をわける比高差約25mの段丘崖がある。また、松川よりの北側にも比高差約10mの段丘崖があり、段丘面の範囲を区切っている。この段丘は松川上流へ向ってその幅が狭くなるのに対し、下流へはその幅を広げている。南側の段丘崖直下には湧水があり湿地帯を形成している。遺跡の中心は段丘中央を東西に伸びる舌状の台地上に広がっていることが今までの調査により確認されている。

調査区内の基本層序を見ると砂と花崗岩を含む黄色砂土がこの微高地の基盤をなし、遺構の覆土は褐色土である。その上部には耕土があるのみでかなり浅い。西側のごく一部は湿地であり、耕土の下にかなり厚い黒色土が堆積する。

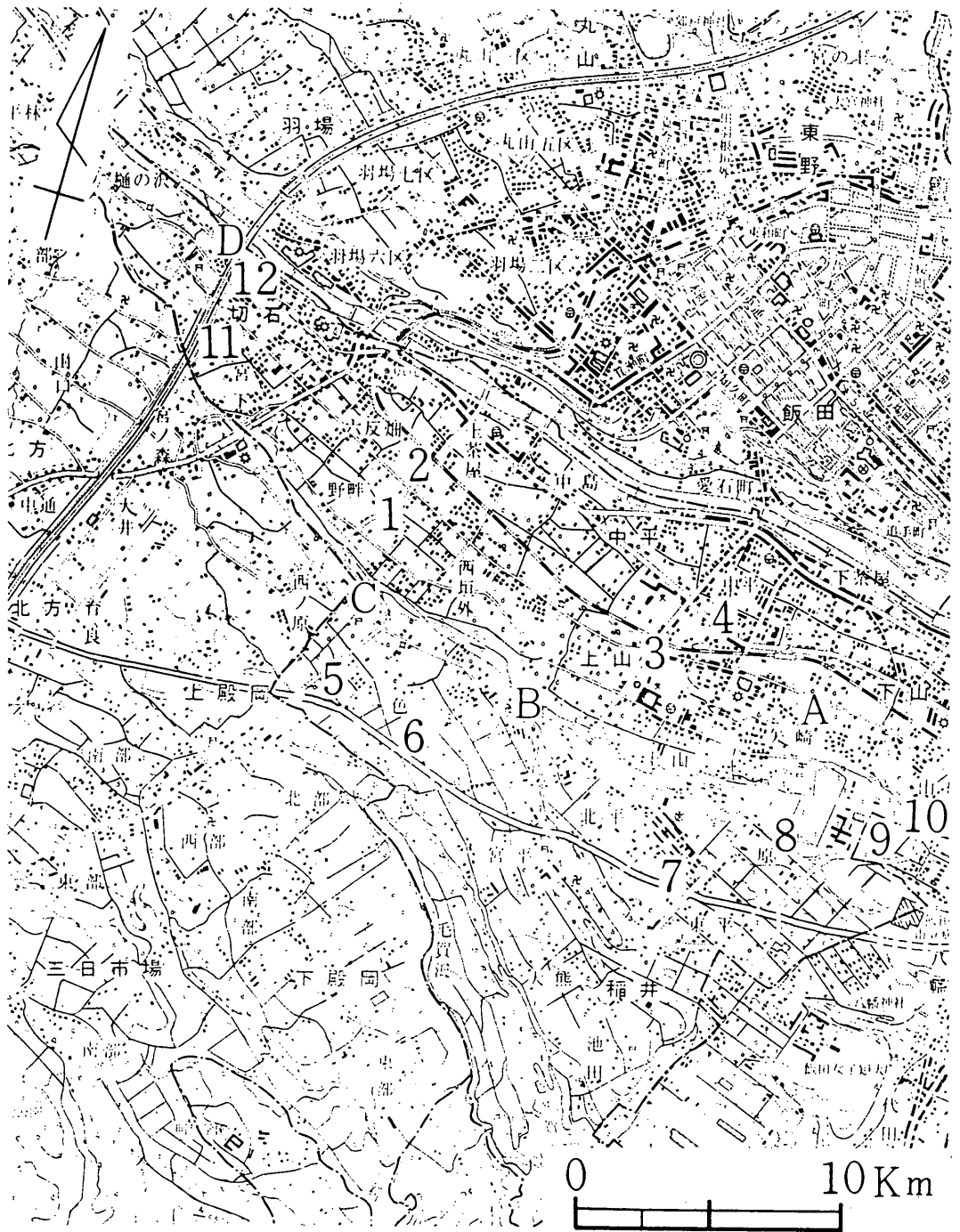
2. 歴史環境と周辺遺跡

日向田遺跡の所在する鼎地区で確認されている最も古い遺跡は、ナイフ形石器が出土している天伯B遺跡と猿小場遺跡ではあるが、いずれも断片的な資料にすぎず、遺構の確認はできていない。

縄文時代早期の遺物である、押型文系土器と条痕文系土器を出土した遺跡としては天伯A遺跡、六反畑遺跡がある。しかし、量はごくわずかで、やはり遺構の確認はされていない。縄文時代前期の集落址を確認した遺跡としては、上位段丘に位置する田井座遺跡がある。縄文時代中期の集落址は、天伯A遺跡・柳添遺跡で確認されている。後期・晩期の遺物のみが出土している遺跡には、六反畑遺跡・猿小場遺跡・天伯A遺跡がある。

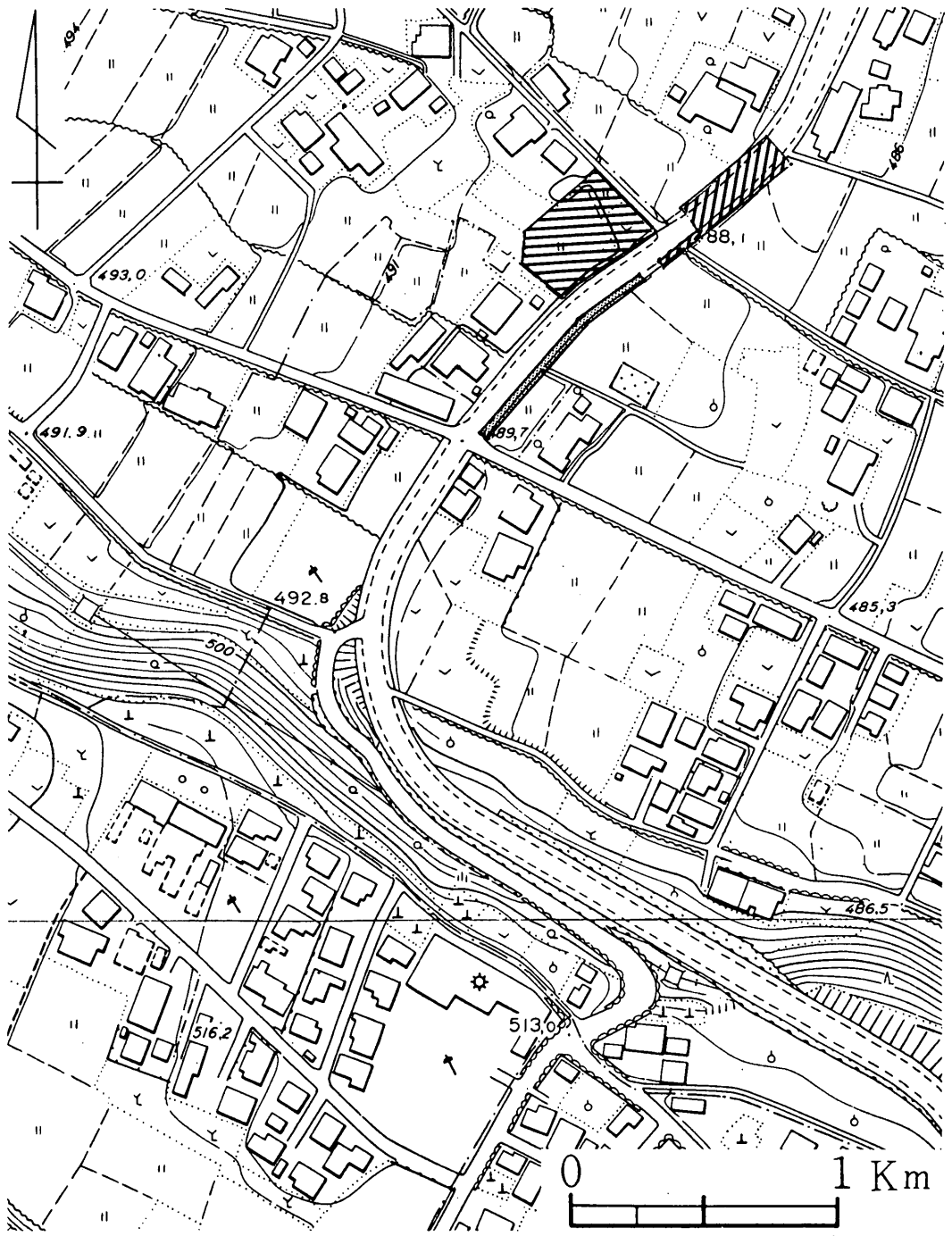
弥生時代の遺跡の数は増える。猿小場遺跡・山岸遺跡・田井座遺跡・一色遺跡などがある。そのなかでも田井座遺跡は後期中島式土器の時代の大集落址であることが確認されている。

古墳時代の集落の調査は比較的多く、黒河内遺跡・柳添遺跡・六反畑遺跡・山岸遺跡・天伯B



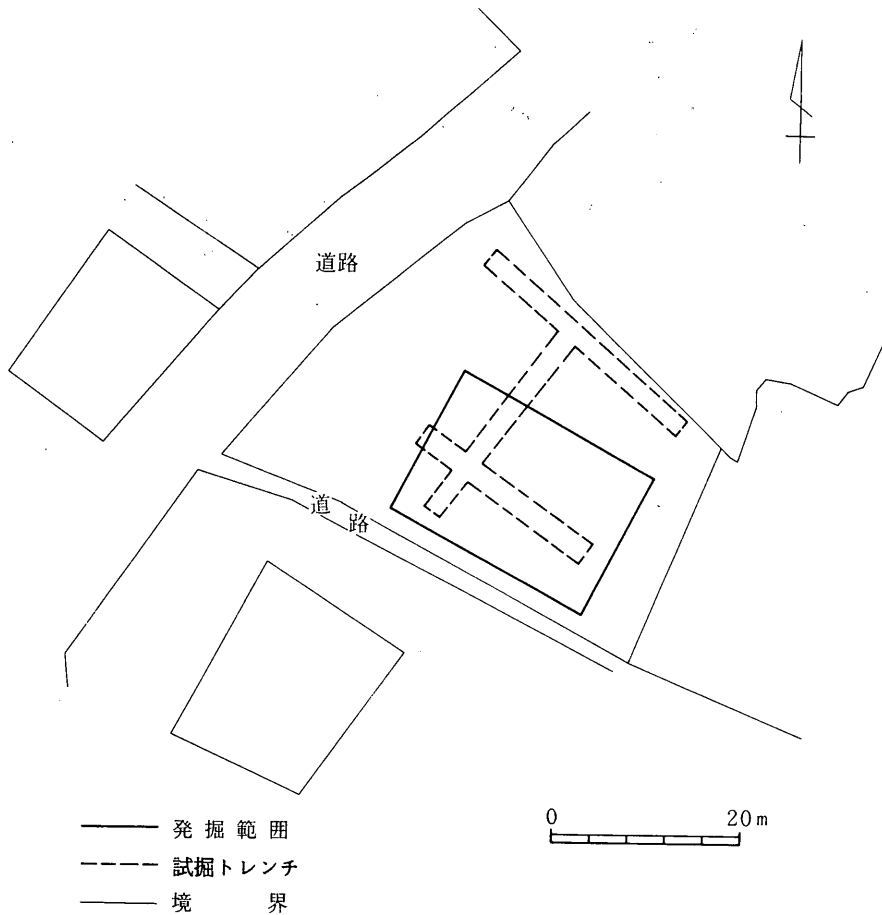
- | | | | |
|----------|----------|-----------|--------------|
| 1. 日向田遺跡 | 5. 田井座遺跡 | 9. 猿小場遺跡 | A. 鞍骨古墳 |
| 2. 六反畑遺跡 | 6. 一色遺跡 | 10. 矢高原遺跡 | B. 須山古墳 |
| 3. 柳添遺跡 | 7. 名古熊遺跡 | 11. 山岸遺跡 | C. 西の原古墳 |
| 4. 黒河内遺跡 | 8. 地藏面遺跡 | 12. 天伯A遺跡 | D. 天白1号・2号古墳 |

挿図1 調査遺跡及び周辺遺跡位置図



- | | |
|--|---|
|  昭和59年度 |  平成元年度 |
|  昭和60年度 |  平成4年度 |

挿図2 調査位置及び周辺図



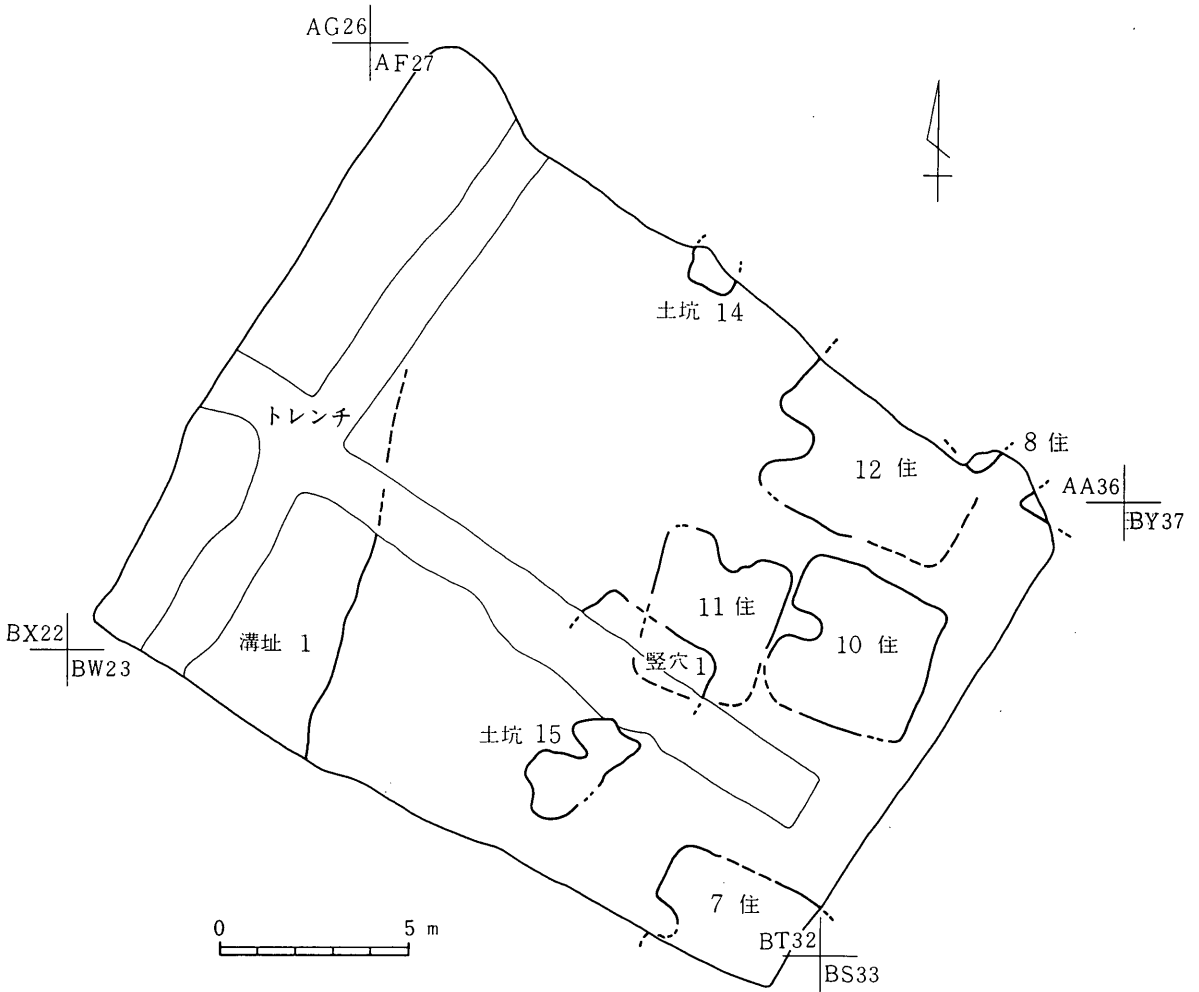
挿図3 調査範囲

遺跡がある。古墳は消滅したものも含めて県地区内に14基が知られている。しかし、詳しく調査されたものは天伯1号古墳・2号古墳と物見塚古墳にすぎない。前者は後期の古墳であり、後者は割竹形木棺を有する竪穴式の主体部をもつ5世紀後半の古墳であることが判明した。その他に形態が把握できているものには、横穴式石室が露出した鞍骨古墳があるだけで、他の10基は実態がつかめていない。

奈良・平安時代には、官道である『東山道』の『育良駅』が隣の伊賀良にあったとされ、座光寺恒川の郡衙へと続くことから、この地区内のどこかを通過していたはずであるが、その箇所はまだ確定できていない。また、全国で起こった荘園の発生はこの地でも例外ではなく、県地区は伊賀良の荘に含まれていた。

平安時代の集落としては猿小場遺跡と隣接する矢高原遺跡に大規模なものが確認できている。さらに日向田遺跡でも集落が確認できた。

中世の遺物は全域で採集できるが、とくに上位段丘の名古熊は松尾城跡に関する館等の所在



挿図4 遺構分布図

も知られており、量が他の地区に比べ多い。特筆すべき資料としては、田井座遺跡で確認した竪穴遺構がある。これは、 4×2 mの長方形のもので中に径1 mの穴が3個あり、常滑焼きの大甕を伴っている。しかし、性格は不明のままである。さらに、山の洞の村沢宅に伝わる古瀬戸の四耳壺は蔵骨器と見られるが、出土遺構がはっきりしていないため、よくわからない部分もある。

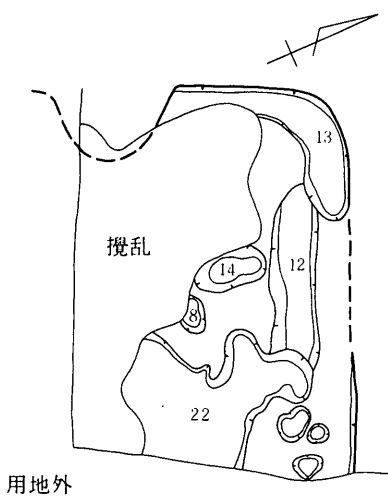
鼎地区には伊久間街道と秋葉街道の分岐点がある。現在江戸時代に建てられた道標が下茶屋に残っている。中馬道として発達した久米街道（三州街道、現国道153号）も通過していた。

III 調査結果

1) 竪穴住居址

① 7号住居址 (挿図5、第1図)

調査区の南東角で確認した住居址であるが用地外に広がる。全体の四分の一ほど調査したのみであるが、中央は攪乱により破壊されていた。規模は4×4mの隅丸方形の竪穴住居址と見られる。用地境にカマドの残骸があったことから主軸の方向はN66°Wと判断できる。壁はほとんど



残っていない。周溝はカマドから北西の角にかけて壁直下に幅40cm深さ9cmの浅いものが残っていた。貼床は中央に一部確認できた。支柱穴、入り口施設等は確認できなかった。カマドは攪乱により破壊されていたが、南側の壁際に用地境に接する場所で焼土がまとまって確認できたためカマドと判断したが、形態は不明である。

出土遺物は、1の須恵器の甕の口縁がある。2、3は須恵器の坏があり、2は底部に糸切痕がみられる。3は底部が欠損しており、口縁付近に火襷がみられる。そのほかには土師器の表面に斜め方向のカキメ調整が残る甕の破片や硬砂岩の敲打器(第1図4)も出土している。

出土遺物から判断して、平安時代後期の遺構である。

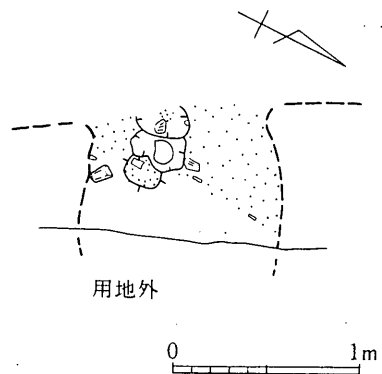
挿図5 7号住居址

② 8号住居址 (挿図6、第1図)

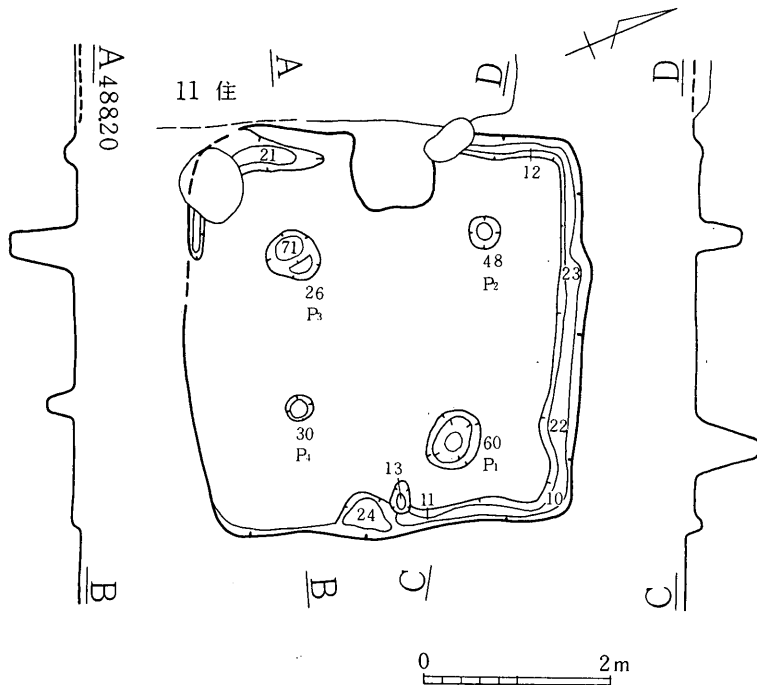
調査区の東角を検出中に焼土と土師器の甕が出土した。状況からカマドの残骸と判断できたため、住居址とした。調査区内にはこの住居址のものとみられる遺構が確認できなかったため、用地外に広がるものと判断した。したがって、規模、主軸方向や壁・柱穴・床等の住居内施設はまったくわからない。

遺物はカマドに残っていたもののみで、5は表面にカキメ調整のある長胴の甕である。

状況からみて、平安時代後期の住居址と判断できる。



挿図6 8号住居址カマド



挿図7 10号住居址

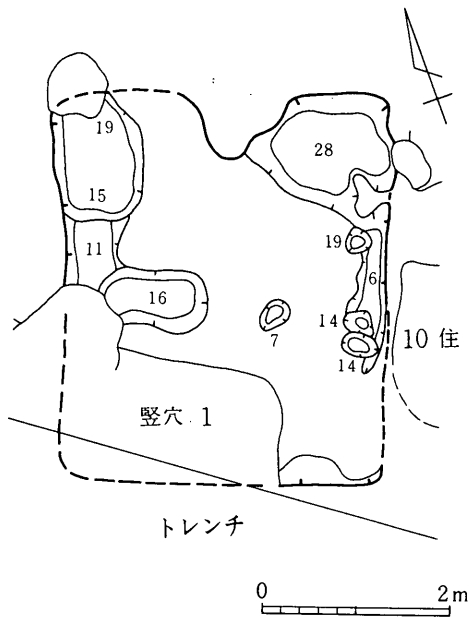
③10号住居址（挿図7、第1・2図）

調査区の東側に11号住居址と壁を接する形で検出し、完全に調査した。4×4.5mの隅丸方形の竪穴住居址であり、主軸方向はN62°Wを示している。壁は南西側で穴に切られている。壁の掘り込みは比較的浅い。周溝は北を中心に壁直下に幅30cm程度のものがあるが、南側には確認できなかった。南西の角には比較的深い周溝がある。床は良好の貼床が全面で確認できた。支柱穴は4本（P1～P4）ある。P1、P3は直径60cmと大きく、掘り込みも60cmを越える。それに対して、P2、P4は30cm程度とひとまわり小さく掘り込みも40cm前後である。入り口は東側の壁のほぼ中央にある。直径60cmの半円形で深さは24cmを計る。この北壁に40×20cmの楕円形の穴がある、これも入り口の施設にかかわるものと判断できる。

カマドは、削平により原形を止めていないが、西側の壁のほぼ中央に焼土がまとまって出土した部分があり、石も数個ちらばっていたため、カマドの残骸と判断した。

遺物の出土は比較的多い。土師器はカキメ調整のある長胴の甕や小型甕の破片（第1図6～8）がある。9、10は坏であるが、土師器はこの2点のみであり、9はろくろで整形されている。10は内面を黒色処理している。これに対し須恵器の坏は図になったものだけでも8点ある。高台が付かず底に糸切りの痕が残るものが5点（第1図11～15）あり、高台付きのものが、3点（第1図16、第2図1、2）である。そのほかには、須恵器の蓋（第2図3）壺の高台部分（第2図4）灰釉陶器の碗の破片（第2図5）が出土している。

遺物等から判断して、平安時代後期の住居址と判断できる。



挿図8 11号住居址

の甕である。9は甕の底部である。坏は土師器のもの(10)と須恵器のもの(11、12)がある。12は高台付きである。

時期的には平安時代後期ではあるが、10号住居址よりはやや古いものとみられる。

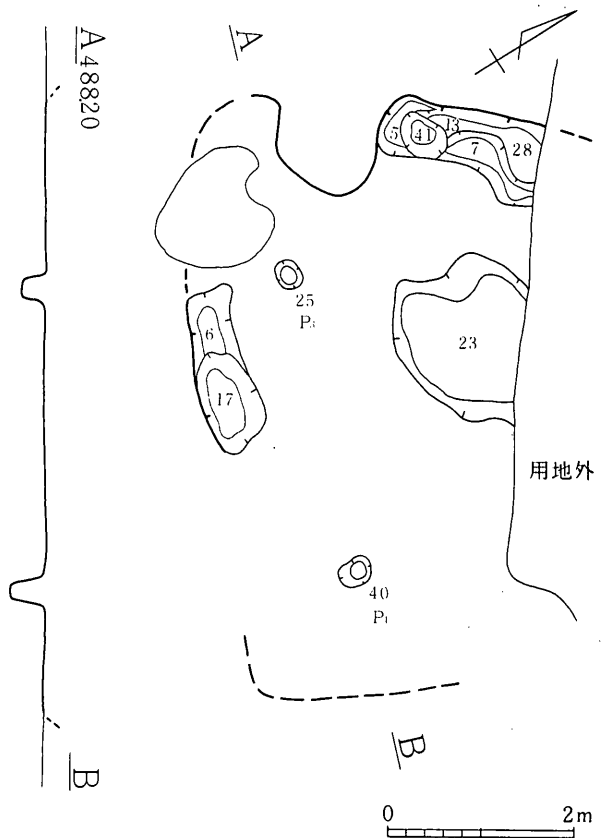
⑤12号住居址(挿図9、第2図)

調査区の北東側で確認した。最初P3、P4の2本の支柱穴を確認したのみであったが、P3の西側に焼土と土師器の甕があったため、カマドと判断し住居址とした。用地外にさらに広がるものとみられ、6×6m程度の隅丸方形の規模になり、主軸の方向はN69°Wを示しているものとみられる。削平により貼床はごく一部が残っているのみで、入り口や壁は確認できなかった。周溝は西側とカマドの横に一部残っているのみである。カマドは西角付近にあったものとみられるが、削

④11号住居址(挿図8、第2図)

調査区ほぼ中央で検出した竪穴住居址である。南側で竪穴1とそれを切る穴に切られている。壁が確認できたのは東側の一部と南の角のみである。規模は4×3.4mの隅丸方形とみられる。主軸方向はN20°Eを示している。残っている壁直下のみに周溝が確認できる。深さは10cm程度である。床は一部に貼床があったが、支柱穴の確認できなかった。入り口は竪穴1に切られたものとみられ、確認できなかった。北角の大きな穴のとなり焼土が認められたため、カマドとしたが、たんぼの造成の時の削平で破壊されたものとみられる。

遺物としては、土師器の長胴甕の他に、6は小型の長胴の甕で、カキメの整形がみられる。7は同様の調整をもつ甕であるが6よりやや小型、8は小型



挿図9 12号住居址

平され形態は確認できなかった。床面で大きな穴を検出したが、住居址に関するものかは不明である。

出土遺物としては、14のカキメ調整の残る長胴甕、15の土師器の坏、16は須恵器の壺の底部と見られる。

遺物、その他の状況からみて、平安時代後半の遺構である。

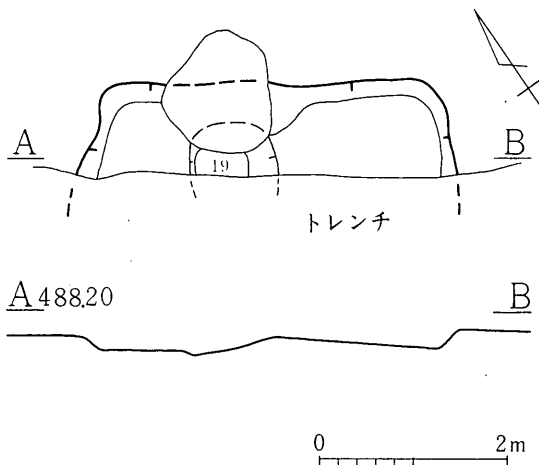
2) 竪穴 (挿図10)

①竪穴1

東西にあけた試掘トレンチにかかって検出したものであるが、北東側で11号住居址を切り、北側では120×120cmの穴により切られている。調査できた範囲は3.8×0.9mである。壁は比較的急角度に掘り込まれているものの、深さは10cm程度と浅い。底部の真ん中付近に穴があり、それに向かって壁際から傾斜している。この竪穴の深さは19cmである。

出土遺物としては、土師器の甕があるが、住居址にかかわる遺物とみられ、この竪穴自体の遺物はなかった。

したがって、この竪穴の時期は平安時代以降であるが、詳細時期や性格は不明である。



挿図10 竪穴1

3) 土坑

①土坑14 (挿図11、第2図)

調査区の北側で用地外にかかり検出した。平面形は楕円形と見られるが、一部調査できたのみであり、全容は不明である。調査した範囲は1.4×0.9mの半円形で、深さは最深部で29cmをはかり、壁は比較的急角度に掘り込まれている。底部は南西から北東に傾斜しており、北東壁直下が最深部である。

遺物の出土は少ないが、17の土師器の甕はカキメのある長胴のもので、18の須恵器はタタキの痕がのこる小型の甕である。

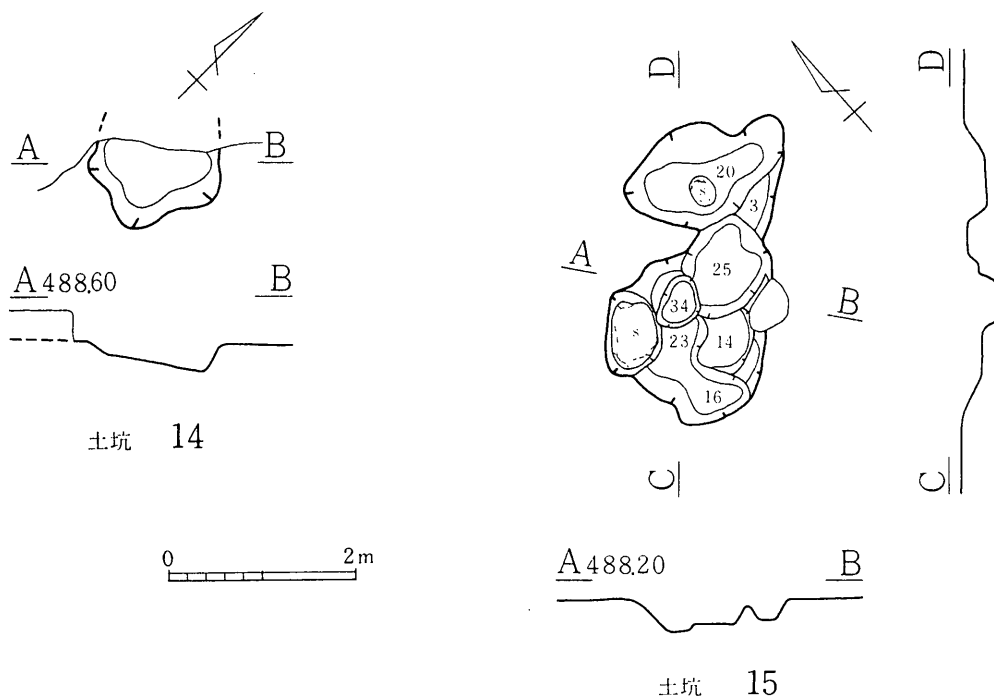
遺物から判断すれば、平安時代後半の遺構であるが、性格は不明である。

②土坑15 (挿図11)

調査区の東よりで暗褐色の覆土をもつ遺構が検出された。当初住居址と考え掘り下げていったが、床や柱穴が確認できず2m前後の穴の切り合いになったため、土坑とした。この土坑の規模

は3.2×1.8mの不定形である。深さは最深部で34cmをはかる。底部は3つの穴に別れており、それぞれが独立した掘り込みを持っている。その深さはほぼ20cm前後である。

遺物は破片が多く図化できなかったが、縄文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器の破片がある。時期は遺物から判断して、平安時代後半の遺構とみられるが、性格は不明である。



挿図11 土坑14・15

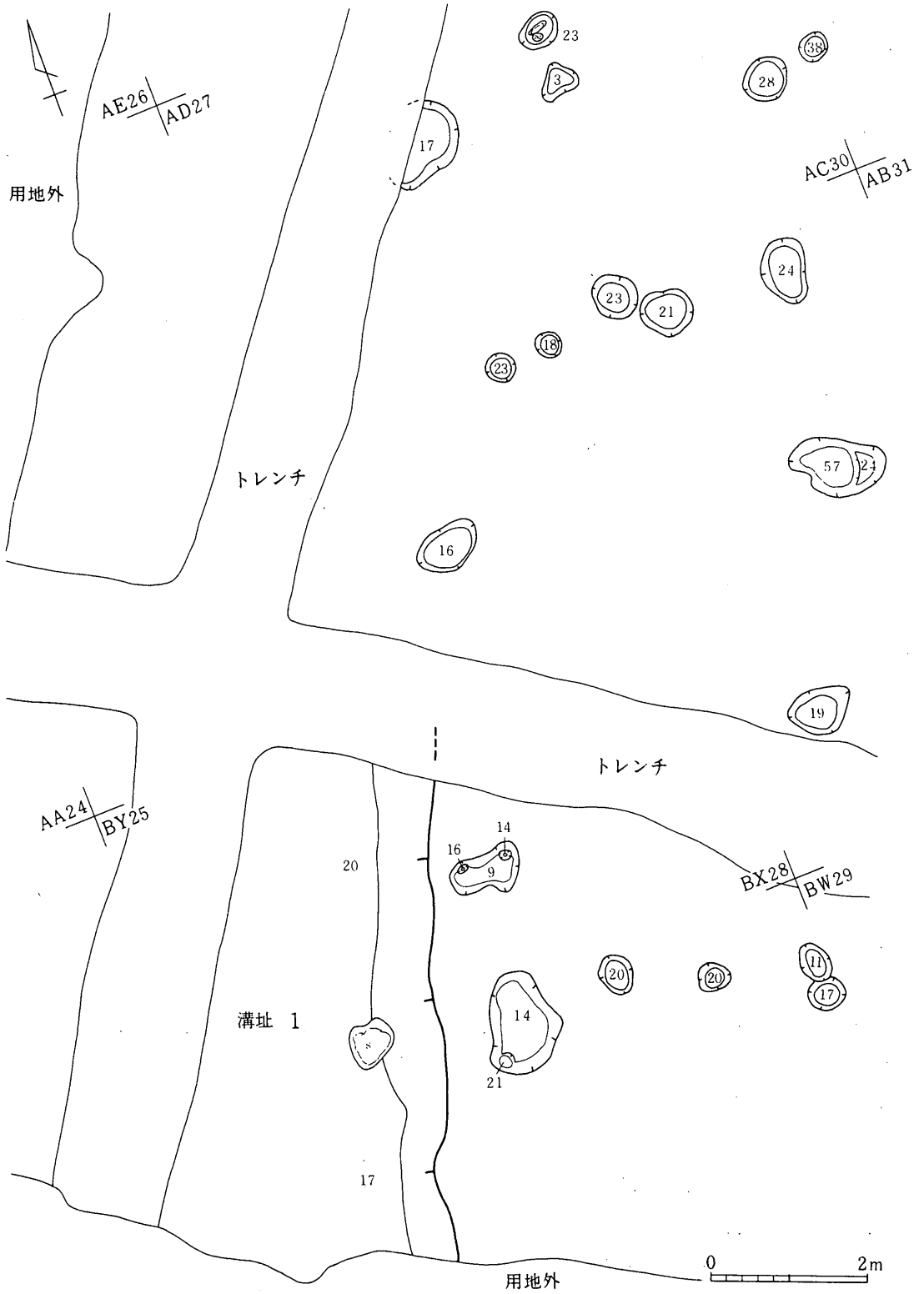
4) 溝址

①溝址1

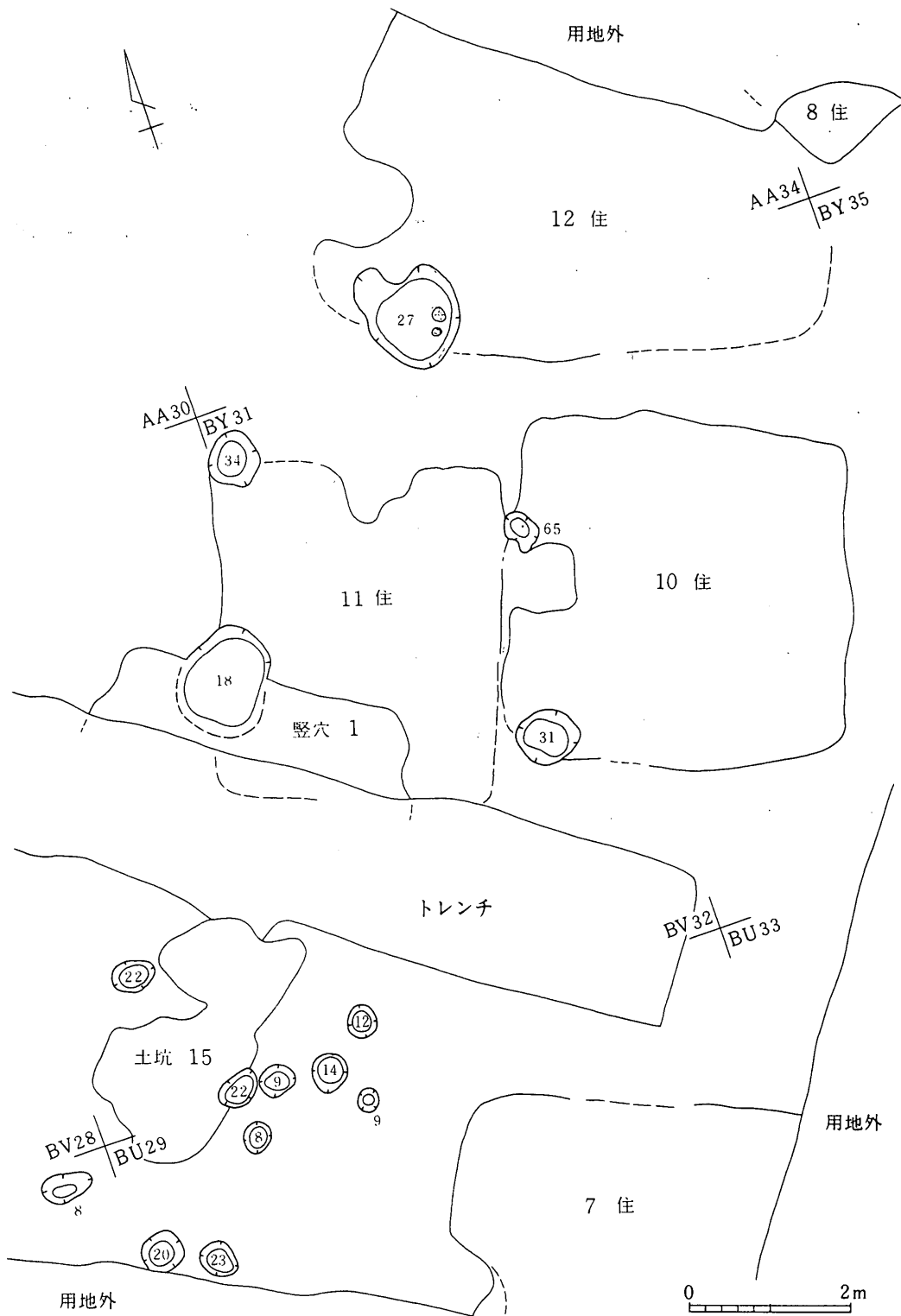
調査区の西寄りで粘湿土の中に砂を覆土とした箇所が南北に検出できたため、溝址とした。しかし、西側の肩は試掘トレンチのためにその位置が確認できず、幅はわからなかった。地形的には西に向かって傾斜しているため、この溝は北から南に向かって水が流れたものとみられる。深さは南の用地境が最深部になるが、17cmと比較的浅い。北に向かうに連れその深さもさらに浅くなり、中央付近にあげた東西方向の試掘トレンチを越えたあたりではほとんどわからなくなっている。底は平坦で、壁は比較的急角度に立ち上がっている。

覆土のなかから須恵器・土師器の破片に混じって、縄文土器等も出土した。

遺物から判断すれば、平安時代遺構の自然水流による溝であるが、詳細時期は不明である。



挿図12 周辺柱穴 (1)



挿図13 周辺柱穴(2)

5) 周辺柱穴 (挿図12、13)

調査区のうちで、いくつかの穴が検出できた。その分布をみる中央が密であり、西側は地形的な条件がよくないためか、ほとんど確認できなかった。また、東側の住居址が分布している箇所には少なかった。

これらの穴について個々に観察したが、平面形・規模・覆土の色等に統一制が見られない。建物址の柱穴の可能性も捨てきれないが、確実に断定できるものはなかった。

6) 遺構外出土遺物 (第3図)

縄文時代から弥生・平安・中世までの土器・石器が出土している。

①縄文時代の遺物

土器の量は非常に少なかった。出土した破片は中期および後期のものと見られる。

石器としては、黒曜石の破片や硬砂岩製の打製石斧(11)・粗製石匙(12)・横刃型石器がある。

②弥生時代の遺物

土器は甕の破片が一片出土したのみである。

石器としては西側の湿地から抉入打製の石庖丁(13、14)が2点出土した。

③古墳時代の遺物

はっきりとこの時期と断定できるものは出土していない。

④平安時代の遺物 (第3図1～7)

土師器と須恵器、および灰釉陶器がある。

土師器としては、表面にカキメのある長胴の甕の破片が目立つ。

坏には内面に黒色を塗付したものとそうでないものの2種類がある。その多くは底部に糸切痕が残っている。そのなかに墨書土器が1点(1)ある。底部に『大』の字を読み取ることができる。須恵器としては、表面にタタキ整形の残る甕の破片が中心である。坏には、高台のあるものもないものがあるが、量的には後者のほうが多い。その他、蓋・壺の破片も少量ではあるが出土している。

灰釉陶器のうち器形が判断できるのは、皿・碗が中心である。壺とみられる破片もあるが、断定できない。灰釉陶器の量はごくわずかである。

⑤中世の遺物 (第3図8～10)

山茶碗の破片や、土師質陶器類が出土しているが器種は特定できない。

IV まとめ

この遺跡は今までに3回の発掘調査が行なわれている。昭和59・60年には市道拡幅に伴う発掘調査、さらに平成元年の店舗建設に先立つ発掘調査である。今回の調査を含めても調査された範囲はこの遺跡のごく一部でしかないため、歴史的な位置付けが具体的になるとは言い難い。いままでの調査から明らかになった事実とそれに関する問題点のいくつかを指摘して、時代ごとに概括することで本書のまとめとした。

縄文時代については、若干の遺物が出土したのみで、明確に本時代に比定される遺構はない。いままでに出土している遺物から判断すれば、縄文時代早期前葉まで遡る物がある。明確に遺構に伴うものはないが、当遺跡が立地する低位段丘上での生活はかなり早い時期から始まるものと考えられる。

縄文中期前半までの遺物の量が少なく、中期後半の遺物の量は増加する。今回調査した箇所東にあたる野菜畑は以前は果樹園であり、所有者である福沢氏はこの畑で炉と見られる石組や、打製石斧等石器類が出土したと語る。同じく所有者の城田氏は中期後葉の深鉢を所持している。これらの事実からいままでの調査地区が当該時期の集落址の周縁的な状況を示していると判断される。

後期・晩期以降の遺物の出土状況は、隣接する六反畑遺跡やその他の飯田、下伊那地方の当該時期の遺跡と同様、遺構に伴うものではなく、廃棄等に関連したありかたと見られる。これは、当該時期の集落の特質に根差した可能性がある。

この遺跡では縄文時代晩期以降間隙があり、続いて弥生時代後期の住居址が前回の調査で確認されているが、今回は遺物のみで遺構は確認できなかった。しかし、今回の調査範囲の西側が低湿地になり、さらに北西に広がりをもつものとみられ、段丘崖直下の湿地が集落のごく近くまでひろがっていることがはっきりした。さらにこの湿地から石包丁が出土しており、前回の調査で指摘した高い生産性を維持する湿地帯が確認できたと見てよい。

本遺跡の主体を占めるのが平安時代後期の遺構・遺物である。今回調査した住居址はいずれも水田の造成により削平を受け、確認面から床面までの壁高はわずかしか残っていなかった。そのためか遺物量が少ない。今回の調査を含めて、当該時期の住居址は8軒となった。時期的には平安時代後半であるが、主軸方向を見れば少なくとも主軸が西を示す2、4、7、10、12号住居址とそれ以外を示す1、8、11号住居址の大きく2時期に分けることができる。遺物の時期からのみの判断であるが前者の住居址のほうが後者よりやや新しいといえる。

この遺跡の立地条件はその湿地利用からみて、弥生時代後期の集落形成に適していると判断できるが、平安時代後半にさらに大きな集落が存在している事実は、平安時代後半において、育良

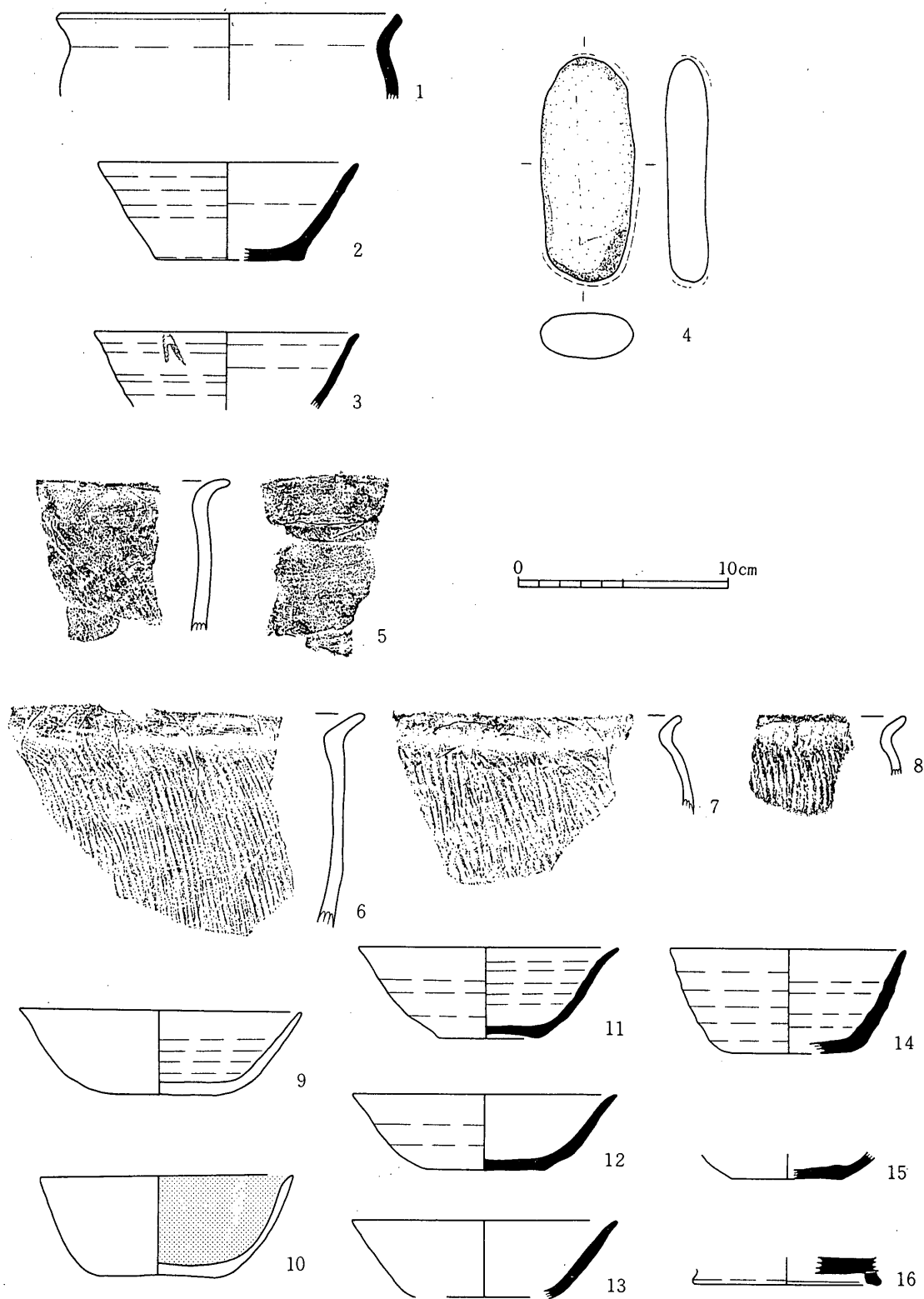
庄成立に大きくかかわった集落の一つとして、位置付けることも可能であり、また、実質的な集落の維持にあたっての生産技術の進歩や湿地利用方法の変化がこの地を大集落として、利用できるようにした一つの要因であろう。しかし、それを示す資料は今回の調査では発見されていないため、結論は今後の調査結果を待ちたい。

遺物では墨書土器が上げられる。今回は遺構に伴わないものが、1点出土しているのみであるが、これで本遺跡からの出土は4点になるが、この時期の一遺跡からの出土量でみれば多いほうではない。しかし、墨書土器の意義から見れば、この遺跡には文字を読み、書き、意味を理解できる人々がいた事になる。この遺跡の性格・在り方を考えるには重要な資料となる可能性が強いが、いままでの資料のみでは断片的でしかなく、今後の課題となろう。

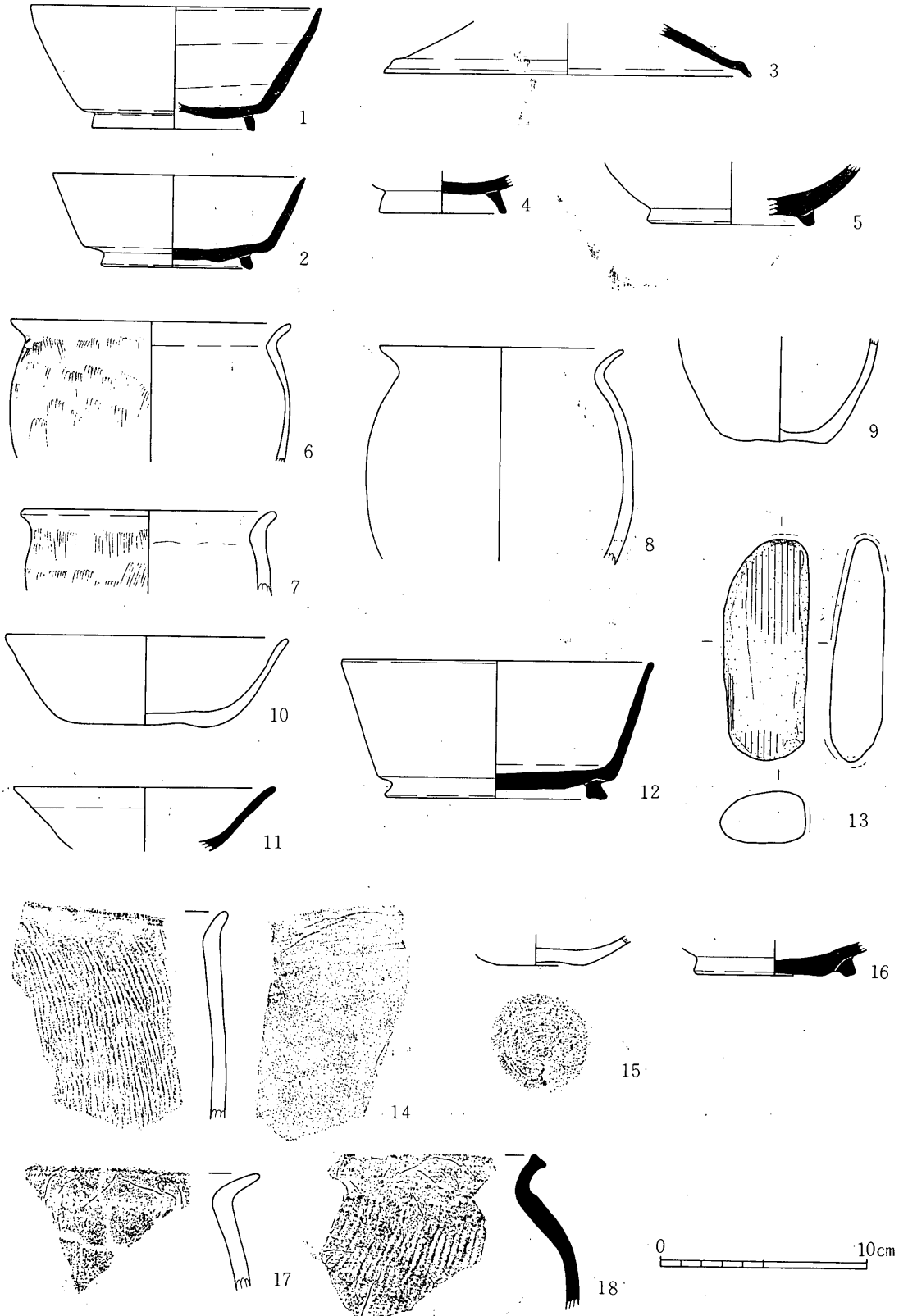
調査の結果、集落経営の実態についての事実の一端といくつかの課題が明らかになった。しかし、調査はこの遺跡の全体に及んだわけではなく、今後隣接地や周辺地点、あるいは周囲の遺跡の調査により縄文時代から平安時代・中世にいたるまでのこの地における集落形成や集落経営の実態が解明されるといえよう。

最後に、文化財保護の趣旨に厚いご理解と多大なご協力をいただいた、株式会社平安堂様にたいし、記して謝意を表す次第である。

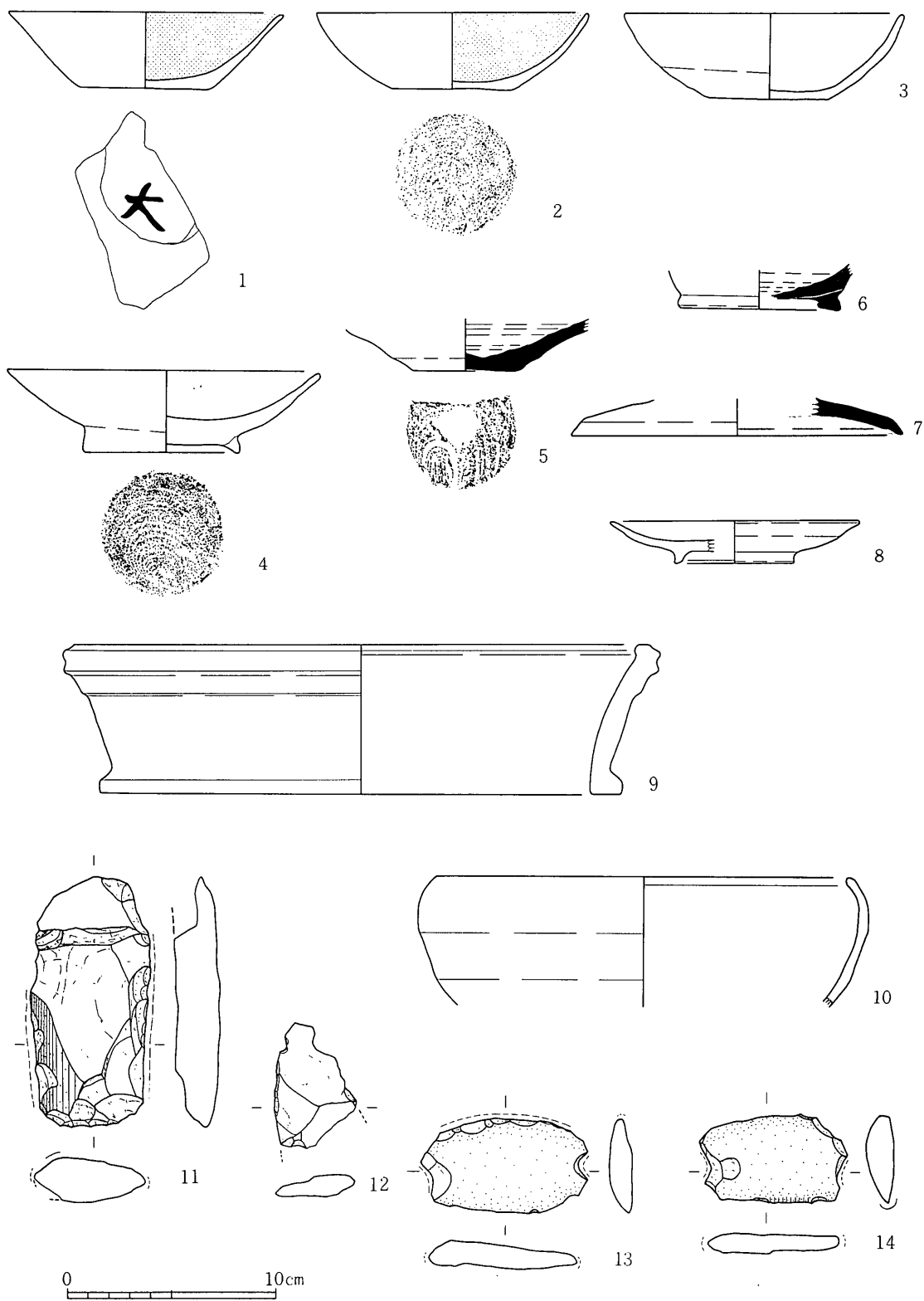
圖 版



第1图 7·8·10号住居址出土遺物(7号住居址1~4)(8号住居址5)(10号住居址6~16)



第2图 10·11·12号住居址·土坑14出土遗物（10号住居址1~5）（11号住居址6~13）
（12号住居址14~16）（土坑14 17~18）



第3図 遺構外出土遺物

写真図版



調査区全景



7 号住居址



10 号住居址

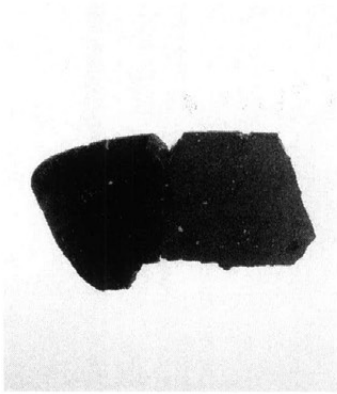
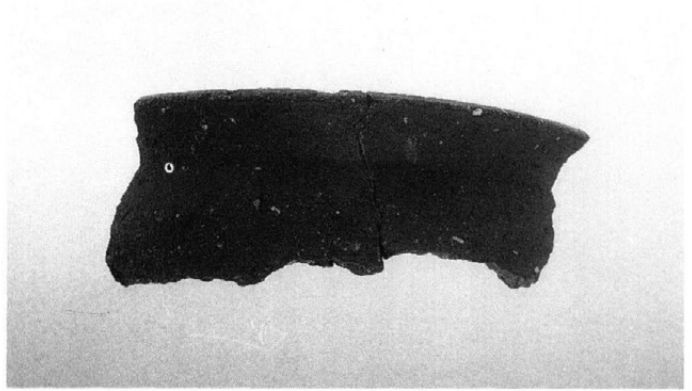


11 号住居址

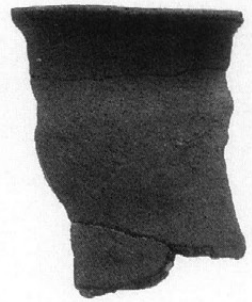


12 号住居址

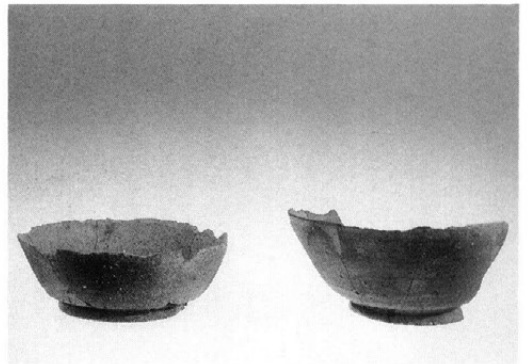
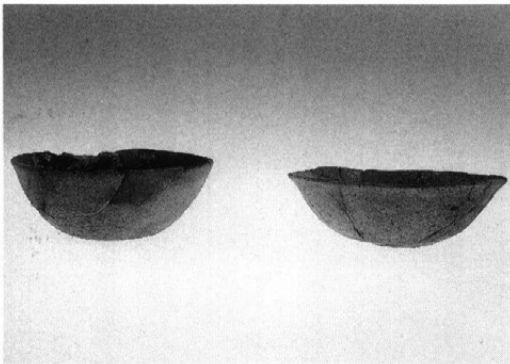
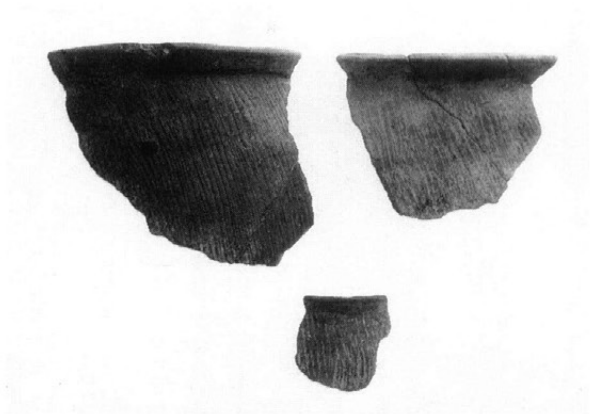
7号住居址出土遺物

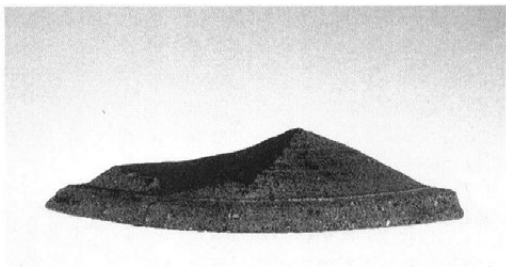
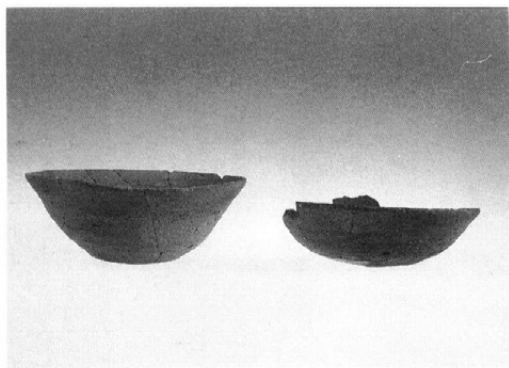


8号住居址出土遺物



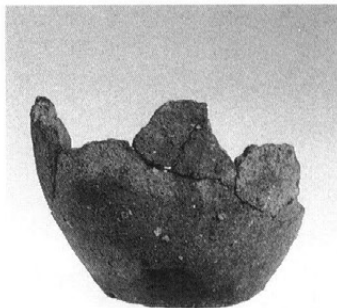
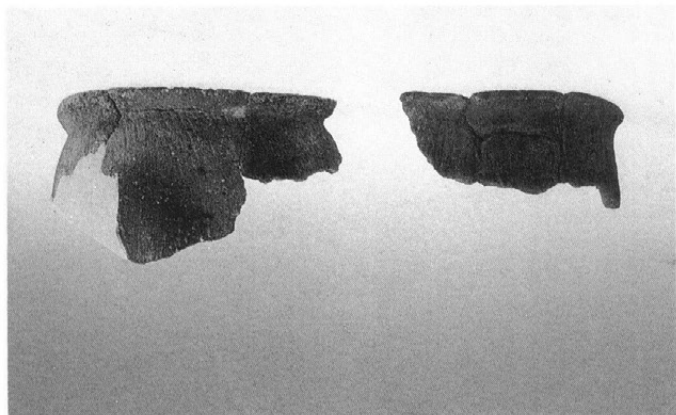
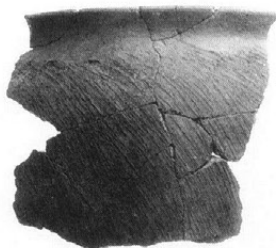
10号住居址出土遺物



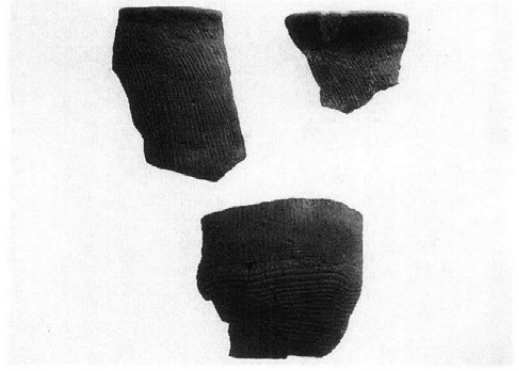


10号住居址出土遺物

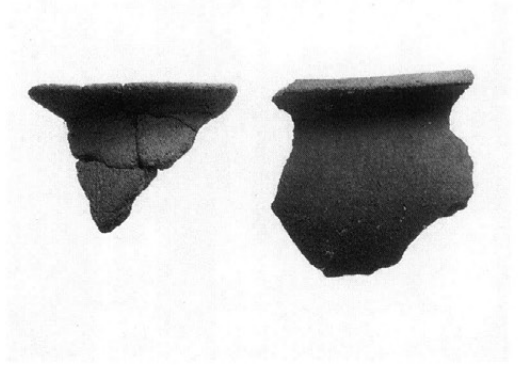
11号住居址出土遺物



12号住居出土遺物



土坑 14 出土遺物



遺構外出土遺物

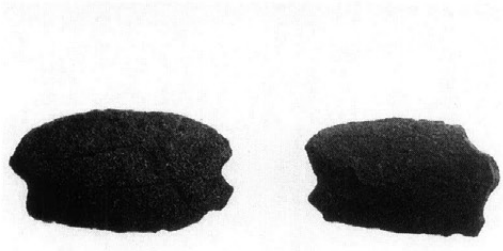
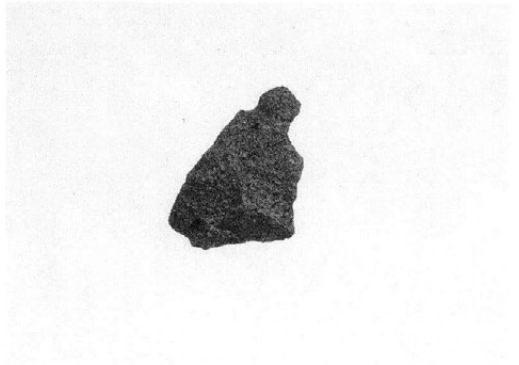
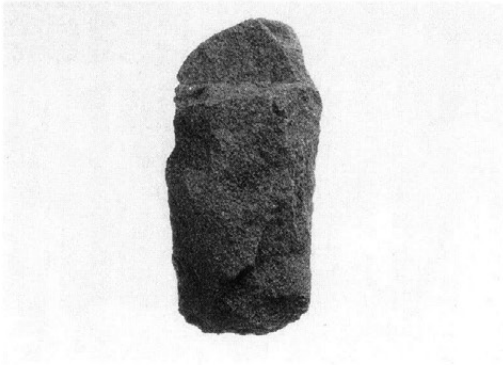
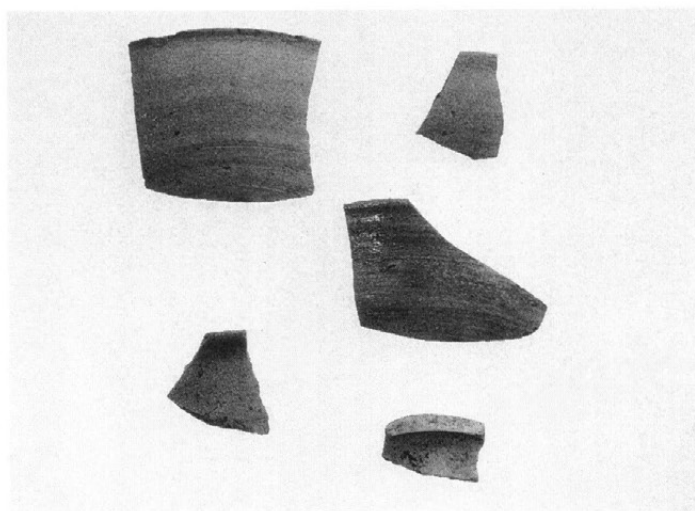


图 版 7

遺構外出土遺物



墨書土器



灰釉陶器



皿

作業風景



検出作業



実測作業



測量作業

V 引用参考文献

- 飯田市教育委員会 1980『猿小場遺跡』
- 飯田市教育委員会 1985『町道知久町中村線道路改良に伴う埋蔵文化財調査報告書』
- 飯田市教育委員会 1989『六反畑遺跡』
- 鼎町史刊行委員会 1986『鼎町史』飯田市鼎公民館
- 中央道遺跡調査会 1973『中央道調査報告 -飯田地区- 昭和45年度』
- 中央道遺跡調査会 1975『中央道調査報告 -下伊那郡鼎町その2・天伯A-』
- 飯田市教育委員会 1990『日向田遺跡Ⅱ』
- 飯田市教育委員会 1992『田井座遺跡』
- 飯田市教育委員会 1992『猿小場遺跡』
- 飯田市教育委員会 1992『矢高原遺跡』
- 飯田市教育委員会 1992『物見塚古墳』
- 飯田市教育委員会 1992『柳添遺跡』
- 飯田市教育委員会 1991『田井座・一色・名古熊下遺跡』
- 飯田市教育委員会 1992『八幡原遺跡』
- 下伊那史編纂委員会 1955『下伊那史 第2巻』
- 下伊那史編纂委員会 1955『下伊那史 第3巻』
- 下伊那史編纂委員会 1991『下伊那史 第4巻』
- 下伊那史編纂委員会 1991『下伊那史 第1巻』
- 長野県史編纂委員会 1983『長野県史 考古資料編』

VI 報告書抄録

ふりがな	ひなただいせき
書名	日向田遺跡Ⅲ
副書名	貸店舗建設に先立つ埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	
編集機関	長野県飯田市教育委員会
所在地	〒395 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 ☎0265-53-4545
発行年月日	西暦1994年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村遺跡番号						
ひなただ 日向田遺跡	飯田市鼎 上山3662 他			35° 30′ 06″	137° 48′ 50″	平成4年 12月2日) 12月21日	400㎡	貸店舗建設
ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
ひなただ 日向田遺跡	集落址	平安時代	住居址 5軒		須恵器 土師器			

日向田遺跡Ⅲ

貸店舗建設に先立つ
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1994年 3月 印刷

1994年 3月 発行

編集・発行 長野県飯田市上郷飯沼3145番地
長野県飯田市教育委員会

印刷 新葉社

